

『ネット社会と子どもたちの実態』

—ウィズコロナの時代に求められる養護教諭の役割—

令和3年12月10日（金）午後3時00分～午後5時00分

佛教大学 副学長 教育学部 教授 原 清治



「ネット社会の中でいま何が起きているのか」、実態データをもとに昨今の子どもたちの姿を教えてくださいました。また、悩みを抱えている子ども、生きづらい子どもが多くいる時代の中で、私たち養護教諭が担うべき役割についても詳しくお話を伺いました。

1 不登校児童・生徒の「再」登校現象

不登校児童・生徒数は年々右肩上がりに増えている。新型コロナウイルス感染症の影響でさらに増え、子どもたちは「いきづらい（生きづらい、行きづらい）」状況にある。一方で、コロナ禍の休校期間が明けた後、不登校傾向の児童・生徒が「再」登校するようになった。その要因としては、①マスクで顔を隠す状態が当たり前になったこと②密を避ける方法としての分散登校がスモールステップとなったこと③集団行事がなくなったこと④「リセット」感を得られたこと、などが挙げられる。

2 ネット社会と子どもたちの人間関係

今の子どもたちにとっては、ネットを介した人間関係が、リアルな人間関係を築く上で有効な環境になっている。リアルな人間関係が重要なことは理解しているが、一旦その関係が崩れると修復不可能と思っている。ネットに寄っているのではなく、リアルが怖いのである。ネット空間の方が互いを尊重できると考えている子どもたちなので、その人間関係を否定してはいけない。ネット空間で互いの距離を測っており、その人間関係の延長線上にリアルな人間関係構築を目指している。

3 スクールカーストの存在

学級内に暗黙の内に存在する上位，中位，下位といった階層分け（スクールカースト）がある。この階層は一旦固定すると動かない。昨今の子どもはスクールカーストへの意識がきわめて高い。「いじり」に目くじらを立てる必要はないが、「いじり」がグループの中の弱い子どもに向かって固定化した時，それはいじめの局面に入っている。事実，嚴重なスクールカーストが存在する学級ではいじりが起こりやすく，いじりが横行する中で，いじめ・ネットいじめが起こっている。京都市を始めとする都市型の学校では，階層が上位の一部の子どもたちの意見で学級が牛耳られていることが多い。スクールカーストが非常に厳しい状態であることを理解し，意識を高くもつ必要がある。スクールカーストの中の「生きづらさ」は，やがて学校への「行きづらさ」につながっていく。

4 多様な価値観への理解

京都市の学校は不登校の割合が非常に高い。学力の高さと不登校率は相関する。また，成績を意識し始めると序列性が強まる。「成績がよい」という価値観が，人間の価値観の最上位に続くような錯覚に陥ることは危険である。いま，一般的に「勉強ができる」子どもたちが学校の中でしんどくなり始めている。保健室に来室する子どもたちのしんどさは，「勉強ができる子の中の競争に負けているしんどさ」も含まれる。養護教諭は，勉強だけがすべてではないこと，人間の価値はそんなことで決まらないことを子どもたちに伝えるとよい。異なる価値観同士がぶつかり炎上するネットトラブルが小中学生で多いことから，養護教諭は，「多様な価値観が存在するのだから様々な考え方があり，自分の価値観が全てではない」という見解に立つことも重要である。

5 まとめ

学級担任は集団に，養護教諭は一人一人に目を掛ける。この均衡がとれると，子どもたちは集団・個別活動に安心して臨むことができ，しんどさにも向き合える。養護教諭は，しんどさに一緒に向き合い，ウィズコロナの時代を生きていく中で大切な感性を，子どもたちに伝えていく必要がある。